代的な認知科学なのであ

が出発点としたのはより現

の本格的な研究をしたわけ

に対する詳細な研究から、

ハイエクの知識論のルーツ

ば、そのような疑念は杞憂

われる。だが、本書を読め

る。本書で直接示唆された、

ームに似ていることはしば ではない。彼の議論がヒュ

しば指摘されるのだが、彼

ハイエクの社会理論

なった論文とは、おそらく

たことはないし、ヒューム 自身はヒュームを参考にし

ノーバー研究所に所蔵され

ため『感覚秩序』の草稿と ハイエクが学生時代にした

を取り扱ったものである。 科学での研究と自由主義論 を基礎づけた自生的秩序論 イエクが没して17年が過 本書は、ハイエクの認知 ものではないこと、特に分 彼の知識論がそれほど深い 過ぎないことを反論の根拠 イエクに対する批判者は、 析哲学の観点から皮相的に

イエクの認知科学の研究で ぎたが、その間にもっとも 研究が進んだのが、このハ

ける知識の意味を論じ、そ ける知識の利用」などの一 連の論文の中で、社会にお ハイエクは、「社会にお として挙げていた。だが、

れを社会主義を始めとする して用いてきた。だが、ハ 市場干渉主義批判の基礎と の伝統的な哲学を利用する 実際にはハイエクはそれら ことがあっても、実際に彼

-8188-2068-5

ハイエクの 社会理論

森田雅憲

社会理論を冷静に分析する

の二本のタイプスクリプトエクの『感覚秩序』の中の

と「精神の本質」(日付無)

にされているように、ハイ そして、本書の中で明らか

することは可能であった。

なくしてもその議論を構築

への論考」(1920年) ている「意識の発達の理論

ハイエクの知識論のルーツと本質を明らかに

進

ったエルンスト・マッハの は、19世紀のオーストリア の物理学者で哲学者でもあ のことであろう。特に前者 たものである。マッハは現 認知科学を批判的に考察し 年代以前の認知科学の成果 ものである。そのため、 の知識論はそれに基づいた イエクの知識論を哲学史の に基づいたものであり、彼 議論は、徹頭徹尾1950

には、

いは「完全にハイエクの手

代的な認知科学の祖でもあ 研究が進んでいると言い難 るのだが、日本では十分に 観点から批判するのは実は 的を外しているといわざる

い人物である。彼自身は若 このような誤解に対する反 を得ない。本書の著者は、 従って書かれていないこと 完全な方法論的個人主義に る。それには、この書が、

を回想してはいるが、哲学 い頃にカントを読んだこと

ないが、その『感覚秩序』

批判が背景にあるように思

に対するイデオロギー的な

批判を行っているわけでは

されるハイエクの進化論の のように結びつくのかを明 と本質を明らかにすること 示している。その中で説明 がら、それが後期の社会理 に成功している。 開される知識論に基づきな 論と特に自生的知識論とど 本書の後半は、前半で展 の研究者がこ れまで見落と は、他の日本 独自性の説明 である。実は ハイエクの最 していたもの 主義とか社会主義といった であったことがわかるだろ 枠組みを超えて、ハイエク とを示している。その意味 り』の中で展開される議論 う。『致命的な思い上が で、ようやく日本でも自由 終了後の今も意味を持つこ 方法であり、それに基づい てたどり着いた社会科学の た研究書が登場したともい の社会理論を冷静に分析し た社会思想である。そして 、イエクの考え方が、冷戦 ハイエクが生涯をかけ

後の著作である『致命的な 思い上がり』(1988年) 「混乱した書」ある 済学史・進化経済学専攻 氏=小樽商科大学教授·経 える。(えがしら・すすむ

によるものではない書」等 学。著書に「入門経済学 專攻。神戸大学大学院博 **士後期課程単位取得退** 同志社大学教授・経済学 ★もりた・まさのり氏は マクロ経済学」など。 九五〇(昭和25)年生。

究者を中心に挙がってい の疑念の声がアメリカの研